

地域創生とランドスケープ： 自然資本の保全と利活用

Regional Revitalization and Landscape Management: Balance between Conservation and Utilization

藤馬 裕一 *Yuichi TOMA*

(株) 三菱総合研究所 地域創生事業本部
Mitsubishi Research Institute, Inc., Regional Revitalization Division



1. シンクタンクの仕事

学生時代は、都市の生物多様性をテーマに研究をしていた。京都の社寺林、五山をフィールドに、緑地のデザインがスマイレ類の遺伝的多様性に与える影響を調査した。生態学の理論を明らかにする面白さには惹かれつつも、まちづくりへの実装にも携わりたいと考えていたところ、シンクタンクという仕事に出会った。仕事を始めて気付いたが、まちづくりと一言でいっても、社会資本整備から都市計画、産業振興や担い手育成、低炭素化・生物多様性などの環境保全まで、内容は多岐に渡る。学生時代に想像した以上にランドスケープが関わる分野は広がっている。

本稿では、現在取り組んでいる仕事の1つとして、「奥入瀬溪流の利活用検討プロジェクト」を紹介させて頂き、ランドスケープの仕事に求められるもの、ランドスケープの今後の展開について考察してみたい。学生の皆様や諸先輩方には、シンクタンクという仕事のイメージが少しでも伝わり、興味を持って頂ければ幸いである。

2. 奥入瀬溪流の利活用検討プロジェクト

(1) プロジェクトの背景

国道103号は、国立公園の特別保護地区内にあり、生活道路としても使われるという特徴を持つ道路である。①災害時の脆弱性、②狭小区間での渋滞発生、③排気ガス・騒音による自然環境への悪影響などの課題があり、奥入瀬（青楓山）バイパスが整備されることとなった（図-1）。

バイパスが整備されると、迂回・交通規制などで道路空間を柔軟に使うことが可能となり、観光振興ひいては地域づくりにも大きな影響がある。また、地域住民の生活との関係も少なくないことから、行政と地域住民が一体となって議論を行うことが望ましいと考えられる。そこで、ワークショップを開催し、交通規制だけでなく、観光振興・地域づくりまで含めて、「地域の将来のあり方（＝奥入瀬ビジョン）」の検討を行うこととなった。奥入瀬ビジョンの策定後には、そのビジョンに基づいて、具体的な計画が策定され、事業に繋がっていくことを目標としている。

なお、奥入瀬溪流のある「十和田八幡平国立公園」は、平成28年7月に「国立公園満喫プロジェクト」の対象地として選定されており、「明日の日本を支える観光ビジョン」の施策として、国立公園のブランド化に取り組むとされる。このように、立地・政策的な背景から、国土交通省・環境省・青森県・十和田市をはじめとする行政、地域住民、交通事業者や観光事業者などの民間といった多様な関係者との調整も行っていく必要がある。



図-1 奥入瀬（青楓山）バイパス事業の位置図

(2) ワークショップの開催

平成27年度には、予備検討のプレワークショップを3回開催した。その結果、地域の課題や魅力的な資源についての共有がなされるとともに、奥入瀬ビジョンの策定を今後どのように進めるかについて、活発な議論が行われた。

そして、平成28年度からは、ワークショップが本格的に始動している。奥入瀬ビジョンを策定するには、まずは、地域のどの資源を（What）、誰に（Who）、どのように（How）堪能してもらうのが価値となるのかを明らかにする必要がある。そこで、平成27年度の議論を参考に、地域の価値の素案を作成して地域住民からの意見を集めた（写真-1）。近々、「誰にどの資源をどのように堪能してもらう地域となるのか」を

1フレーズで、奥入瀬ビジョンとして取りまとめる予定である。

なお、本プロジェクトでは、地域住民への情報提供を重視している。自分たちの意見が政策に反映されていることを実感してもらうために、ニュースレターを発行しており、ホームページにも公開している¹⁾。御関心のある方には、目を通して頂ければ嬉しく思う。



写真-1 ワークショップの発表の様子（写真右が筆者）

（3）プロジェクトの今後の展開

ワークショップは、地域住民に、幅広く・自由に意見を述べてもらう場である。今後は、ワークショップも継続して開催しつつ、奥入瀬ビジョンの素案を作成して、行政に提案する場として、地域協議会を設立する。地域協議会の役割として、①奥入瀬ビジョンの素案作成はもちろんであるが、②観光地域づくりを担う組織などの体制づくり、③具体的な計画や事業の検討、④情報共有の場づくりについても、担えるように発展させていければと考えている。

3. ランドスケープの仕事に求められるもの

奥入瀬溪流の利活用検討プロジェクトの経験を中心に、ランドスケープの仕事に求められるものを3つ挙げてみたい。

まず、「現場力」である。日頃の業務では、ウェブ調査・文献調査も多いが、地域の現場を訪れて、実情を見て、様々な関係者から生の意見を聞くことが重要である。事前学習として、インターネットによる情報収集はもちろん必要であるが、文字情報にはない「本音」を知っていることは強みとなる。また、地域づくりの分野では、ワークショップなどで地域住民の意見を収集して政策をつくり、事業に展開するというボトムアップアプローチが増加してきており、現場を訪れるフットワークの軽さは、今後ますます求められるであろう。

次に、「協働力」である。省庁横断、産官学民で連携をしないと、解決できない課題が地域には山積している。奥入瀬溪流の利活用検討プロジェクトにおいても、既に地域で役割を担う多様な主体が関わっている。これからは、それぞれの立

場を理解した上で、うまく橋渡しをするコーディネート能力が求められる。地域に必要な主体がない場合は、新しく連れて来ることも有効であろう。人的ネットワークがまだまだ狭い筆者にとっては、今後の課題でもある。

そして、「挑戦力」である。ランドスケープが関わる分野は多岐にわたる。自分の得意分野に閉じず、新しい分野に積極的に挑戦することが重要である。筆者も学生時代のバックグラウンドは主に生態学であったが、経済学・公共政策の評価など、分野を広げてきた。複合的な領域から、新しい政策・事業の芽が生まれることもあるし、自分の強みに磨き上げることができるかもしれない。学生時代からも、色々なことに取り組んでおくと、新しいことに挑戦するハードルも下げられるであろう。

4. 今後のランドスケープの仕事の展開

最後に、今後のランドスケープの仕事の展開について考えてみたい。

最近の動向として、単なる調査研究に閉じず、提案した計画を実践し、評価・改善するというPDCAサイクルの運用まで求められるようになってきている。まさに、政策・事業のマネジメントに関わってくるため、難易度は増加しているが、その分やりがいも大きい。より深く地域に関わることで、現場が変わってくる所を見られるかもしれない。

そして、奥入瀬溪流の利活用検討プロジェクトのように、溪流・森林などの自然資本の「保全」と観光などへの「利活用」を両立する仕事も出てきている。地域を活性化するには、保全は前提としつつ、いかに産業などに利活用するかが重要である。ランドスケープは、まさに両者を繋ぐ領域であり、橋渡しをする期待も大きいだろう。

筆者自身、まだまだ勉強中であるが、「計画だけでなく実践・評価・改善」、「自然資本の保全と利活用の両立」について意識しながら、今後も様々な経験を積んでいきたい。

（略歴）

京都府亀岡市生まれ。京都大学大学院農学研究科森林科学専攻修了（環境デザイン学研究室）。2013年より現職。官公庁・自治体等から委託を受け、公共政策の評価、経済効果分析、国土・地域政策の立案に関する調査に従事。最近では、地方創生の一環として、観光・食農などの地域産業の戦略策定にも取り組む。

参考文献

- 1) 青森県県土整備部道路課：国道102号（奥入瀬溪流）の利活用に関する取組みについて
<<http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kendo/doro/oirase-r102.html>>, 2016.08.22 更新, 2017.03.06 参照